様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３５００

研究課題名（和文）青いウィーンにみる「最底辺」社会層の生活史―「下」からのグローバルヒストリー研究

研究課題名（英文）A Social History of the "Blue Vienna": A Critical Approach for Globalisation from "below"

研究代表者
水野　博子（Mizuno, Hiroko）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：２０３３５３９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,070,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、社会民主主義的な「赤いウィーン」から新自由主義的な「青いウィーン」へと変容する史的展開を、「最底辺」社会層――とくに定住化した「移民的背景を持つ人びと」――の生活史に着目して検討し、下からのグローバルヒストリーを考察することを主眼とした。調査は主としてバルカン地域出身の住民らをめぐる、都市内部の生活空間の歴史的変遷、統計資料分析、個々のインタヴューなどを通して行なった。その結果、移民系貧困層がウィーン市の労働市場を規定する一方で富裕層向けサービス産業市場を支えていることを明らかにした。その中で移民系住民は、「われわれの言語」戦略を通して文化的「共生」を図っていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
都市内部の新自由主義的な空間的変容がかつての「赤いウィーン」時代を通して行われた都市改造に基づき進行していることがわかるとともに、その棲み分けと社会階層間の断絶をますます固定する歴史的、現代的構図の一側面を明らかにすることができた。それと同時に、移民的背景を持つ人びとがしばしば最底辺貧困層を形成する一方で、都市の発展を支える存在であることも指摘し、構造的な社会格差を批判的に考察する視座を獲得することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the historical development of structural transformation of social democratic "Red Vienna" into neo-liberal "Blue Vienna" from the perspective of “global history from below”. It mainly focused on life histories of people with Balkan backgrounds who compose substantial parts of population of Vienna. By combining an interview-based micro-historical survey with general statistic data analysis, it turned out how deeply the labor market is defined by the “poor immigrants” in Vienna. At the same time, we revealed that it is such social classes which neoliberal service industry markets targeting the wealthy inhabitants rely on. In spite of such structural social differences, however, we found out that they, in some cases, successfully live in a cultural "symbiosis" through "our common languages" strategies.

研究分野：歴史学

キーワード：青いウィーン　赤いウィーン　現代史　移民史　バルカン移民　新自由主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景には、これまで研究代表者が研究分担者らとも協力しながら検討してきたオーストリア国民論研究の分析枠組みを、新自由主義的な構造転換を経験する社会に応用できるような理論的、実践的基礎研究へと発展させる必要性を感じていたことがあった。というのも、長期にわたってオーストリア国民は誰か、という問いを検討するにあたり、もっぱらドイツ国民という視座からのアプローチを採用してきたからである。こうしたアプローチ方法は、19 世紀から 20 世紀にかけての国民主義の台頭をみれば大きな歴史的意義を有していたと思われる。しかしながら、急激に進行する新自由主義的な社会の変化を前に、「移民的背景を持つ人びと」を容赦なく吸収し、大都市化を経験するウィーン市のような地域においては、同質的な社会編成の成功を暗示するような近代史的な「オーストリア国民」論的観点を維持する限り、「移民的背景を持つ人びと」の存在を十分自覚的な方法でその国民論の枠内に位置づけることはできず、その理論的、実践的限界があると考えるようになっていたのである。

２．研究の目的

そこで、もともと「赤いウィーン」として、大規模な社会構造的近代化を経験した都市で知られるウィーン市が、20 世紀後半以降、多くの「移民的背景を持つ人びと」を吸収し、経済構造を転換してきた様子を、（新）自由主義的な色の表象を用いて「青いウィーン」とみなす仮説を立て、その史的展開の解明を「最底辺」社会層の生活史に着目して考察することを研究の主たる目的とした。とくにウィーンに定住化した「移民的背景を持つ人びと」に着目し、1990 年代以降急速に進んだ新自由主義的な構造改革の時代をどのように生きたかについて、社会史的観点から解明することを目指した。その際、労働市場の流動化、越境する労働ネットワーク、「最底辺」化する女性たち、「最底辺」社会層の住空間再編、共生の技法論の５つのアプローチ方法を設定し、統計・文献資史料の収集とオーラルヒストリーの両方から調査を進め、「下から」のグローバルヒストリー研究の可能性を探求することを目的とした。

３．研究の方法

以上のような目的を達成するため、以下のような研究方法に基づき研究を進めた。

（1）　統計・文献調査を通した「移民的背景を持つ人びと」に関する社会経済史的検討

1950 年代以降 1980 年代までと 1990 年代以降 2014 年までにウィーンに移住した「移民的背景を持つ人びと」について、オーストリア及びウィーンに関する統計資料の調査・分析を行い、歴史的推移に関するデータと現状把握を行った。また、1990 年代以降の「移民的背景を持つ人びと」がウィーンで暮らすようになった送出国側の歴史的背景を調査し、1950 年代から 70 年代にかけて増加した労働移民世代との違いを明らかにした。

（2）　受入れ地域側の生活史の調査・検討

ウィーンは歴史的に見て、社会的ミリューの違いによって区割りがなされてきた伝統がある。とりわけ 1860 年代から本格的に始まった都市化の過程で、「黒いウィーン」の象徴である「リング通り」の建設整備が進み、1920 年代には「赤いウィーン」の代名詞である「ギュルテル通り」を中心に労働者層が独自の生活空間を形成していった。「市内区–市外区–郊外区の三層構造」と呼ばれるこれらの状況を踏まえて、本研究の主題である「青いウィーン」の特徴はどのような点に表れているかについて、昨今急速に進む「ジェントリフィケーション」による都市空間再編の観点から検討した。

(3) オーラルヒストリー研究による生活実践の調査

特にプロジェクト 2 年目以降は、複数の班に分かれてインフォーマントに接触し、集中的にオーラルヒストリー研究を実施した。まず、フィールドの候補地及びインフォーマント選定のための予備調査を行った。その後、具体的な調査対象として、ユーゴ系、ブルガリア系、アフリカ系の移民調査を進めることとし、現地への研究者の派遣を行った。その際、当初計画していた調査地区のうち、とりわけ 15－16 区の住民及びバルカン地域とのネットワークを必須とする商品作物販売関連の市場労働者、ならびにアフリカ系住民の文化的統合の問題について、インタヴュー調査を行った。

(4) 都市内部の空間的構造転換の史的変遷に関する調査

2 区及び 10 区については急速なジェントリフィケーションが推進されている状況に鑑み、都市内部の空間的構造転換がどのように進行しているかについてウィーン市の都市改造計画の調査を通じて明らかにした。

(5) 研究上の意見交換及び国際的な学術交流

上記の調査と並行して、定期的に研究ミーティングを実施し、調査の途中経過に関する情報共

有を図った。さらに 2017 年度には移民研究と都市比較史の専門家を２名、オーストリア・グラーツ大学から日本に招へいし、東京と関西で合計４度の国際シンポジウム及び国際ワークショップを開催した。

４．研究成果

全体の研究期間を通じて得られた研究成果は以下のとおりである。

(1) ウィーン市が作り出す新自由主義的なサービス産業市場にとっては移民的背景を持つ人びとの廉価な労働力が不可欠であり、なかでも野菜や木花などの商品作物は、東欧・バルカン諸国（とくにブルガリア）等で栽培されてウィーンで消費されるものが多いことから、生鮮品の卸売り市場に必要な労働力市場はこれらの地域出身の労働者らによって規定されていることを明らかにした。しかしながら、同時に、移民労働者はしばしば「不法」滞在と「合法」滞在のはざまで暮らすため、「外国人労働者」として容易に「オーストリア国民」の枠組みから排除され、生活基盤を奪われやすい状況にあることがわかった。こうした排除の構造は、ポピュリズムが台頭する現代社会においては、社会経済的な観点に加え、「ドイツ語」中心主義的な文化的排除の構造にも直結するものであることも指摘した。

(2) 「移民的背景を持つ人びと」の中にも社会格差が生じ、特に女性の社会的地位はきわめて不安定である。その背景には、概して新自由主義的な労働市場の規制緩和があるだけではなく、とくに配偶者や生活上のパートナーから受ける身体的暴力ゆえに、極めて厳しい生活環境に追い込まれることも少なくないことがわかった。行政上の支援が不十分ではないなかで、「移民的背景を持つ人びと」のコミュニティ内では、しばしば長期間ウィーンで暮らすなかでドイツ語を習得した女性たちがこうした最貧困層の女性たちを支援することもあり、格差に対抗する社会的紐帯が広い意味での「同郷」出身者コミュニティにおいて構築されていることが判明した。

(3) 歴史的にも文化的にもきわめて多様で巨大な文化資本を持つウィーンは観光都市として発展してきた。とりわけ新自由主義的な市場競争原理の観点から 90 年代以降の観光産業への資本投資は大きく、シェーンブルン宮殿やプラーター公園の大観覧車がテーマパーク化してきたことはつとに指摘されてきた。こうした動きは 2 区及び 10 区の大規模な都市改造によって加速的に進められており、富裕層にとってのサービス産業市場を創出するものであった。ところが、そうした大改造の労働は、都市住民として暮らす「移民的背景を持つ人びと」こそが自身の住空間をも奪われながら担ってきた。この意味で、社会的格差は、新自由主義的な都市構造の転換を通じて固定され、ますます拡大されていく実態を把握することができた。

(4)旧ユーゴ出身の「移民的背景を持つ人びと」は、紛争の末に複数の国家に分裂し、もともとの出身国であるユーゴスラヴィアを失った経験から、ウィーン市という一つの空間を共有するなかで、「民族的帰属」を主張しない知恵として、例えばクロアチア（語）、セルビア（語）、スロヴェニア（語）などという表現の代わりに「私たち」や「私たちの言語」という複数１人称名詞表現を用いるコミュニケーションスキルが共有されていた。これらの生活実践が可能となった背景には、ウィーン市民（及びオーストリア国民）というアイデンティティを共有しつつも、とりわけ「同郷」のサッカーチームの形成やセルビア正教会のような宗教的な文化施設、さらには往年のスターのコンサート訪問により、「移民的背景を持つ人びと」が文化空間としてのユーゴスラヴィアの追体験する土台が広範囲に存在していることがわかった。また、ウィーン市で唯一の旧ユーゴ系の書物を扱う書店（主）が、「移民的背景を持つ人びと」の中でもとりわけ知識人層にとっての重要な文化的ネットワーク拠点として機能していることもわかった。

(5) 「移民的背景を持つ人びと」を吸収し、ますます膨張を続けるウィーン市の新自由主義的な構造転換は、従来の近代史的視角を踏襲するオーストリア国民論の限界を明らかにするものと結論付けた。その際、二つの観点から新たな国民論の構築のための視座を獲得した。一つは、ドイツ人との区別を基本とする従来のオーストリア国民論が西欧中心主義的なリベラル・デモクラシー的イデオロギーを前提としたものであったことである。換言すれば、東欧との共存を前提とした考察枠組みを排除する論理がアプリオリに設定されていたのである。この点と関連して、第二に、新自由主義的な都市内部の格差拡大と深化の過程を把握するには、「下」からのグローバリゼーション論のように、共同体内部の同質性を志向するリベラル・デモクラシーが排除しがちなバルカン、アフリカ地域からの「移民的背景を持つ人びと」をも包含する新たな分析視角を必要とするという点である。とくに、都市内部に現出し始めている「グローバルサウス〈南〉」と「グローバルノース〈北〉」間の構造的格差の問題――21 世紀型の南北問題――を批判的に考察するためのさらなる理論的発展は必須であり、今後の課題として、「グローバル・コロニアリズム」論への接続はその一つの選択肢となりうるとの結論を導き出した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小沢弘明・永原陽子・鈴木茂	４．巻 1146号
２．論文標題 (鼎談)「1989年を世界史的に考える」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『思想』	６．最初と最後の頁 22-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小澤弘明	４．巻 989号
２．論文標題 「歴史学研究会における男女共同参画」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『歴史学研究 増刊号』	６．最初と最後の頁 204-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川高子	４．巻 17号
２．論文標題 「20世紀初頭オーストリアにおける労働者たちの登山思想」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『日本山岳文化学会』	６．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川高子	４．巻 99号
２．論文標題 「戦間期オーストリアにおける登山思想―労働者登山家協会自然の友のリベラル性―」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『東京外国語大学論集』	６．最初と最後の頁 16-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川高子	4．巻 98号
2．論文標題 「国民化される「内部の自然」―「赤いウィーン」市政下の自然の友による受容と抵抗」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『東京外国語大学論集』	6．最初と最後の頁 13-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川高子	4．巻 64
2．論文標題 「戦間期オーストリアにおけるナショナルツーリズム―E．ピヒルの思想と活動から―」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『現代史研究』	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 水野博子	4．巻 第3376号
2．論文標題 「民主主義とは何か、根源的な問い（近藤孝弘著『政治教育の模索――オーストリアの経験から――」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『図書新聞』（武久出版発行）	6．最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小沢弘明	4．巻 23
2．論文標題 新自由主義の時間と空間	5．発行年 2018年
3．雑誌名 「年報日本現代史」編集委員会編『年報日本現代史』	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 水野博子	4．巻 第3321号
2．論文標題 「国家の長い影」の考察とミクロな視点からの社会構造史――二〇世紀のオーストリア史を多角的に描いた渾身の一冊	5．発行年 2017年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 4-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小沢弘明	4．巻 39巻1号
2．論文標題 大学における歴史教育の目的と内容	5．発行年 2017年
3．雑誌名 大学教育学会誌	6．最初と最後の頁 1（巻頭言）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小沢弘明	4．巻 870
2．論文標題 ウィーンのアフリカ人	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史地理教育	6．最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小沢弘明	4．巻 通巻469号
2．論文標題 世界史的立場から考える	5．発行年 2017年
3．雑誌名 憲法運動	6．最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎信一	4．巻 162号
2．論文標題 「「共通の歴史」の描かれ方　ーセルビアとクロアチアの教科書にみるユーゴスラヴィアの歴史ー」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『駿台史学』	6．最初と最後の頁 157-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 水野博子	4．巻 159号
2．論文標題 国民の境界をまたぐ人々―オーストリア・ブルゲンラント・ロマを例に―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 駿台史学	6．最初と最後の頁 115-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小沢弘明	4．巻 226号
2．論文標題 新自由主義時代の歴史学―下からのグローバルヒストリーについて	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史科学	6．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 百瀬亮司	4．巻 125編7号
2．論文標題 新刊紹介・『教養のための現代史入門』	5．発行年 2016年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 115-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takako FURUKAWA	４．巻 19
２．論文標題 Interwar Austria’s Continuity between Liberalism and Nationalism from the Viewpoint of Alpine-Tourism	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Quadrante. Areas, Cultures and Positions	６．最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 江口布由子
２．発表標題 国境の経験ー第一次世界大戦直後の東中欧における国籍と親子関係
３．学会等名 東欧史研究会（シンポジウム「ロシア・東欧の第一次「戦後」―移動する人々の視点から―」）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木珠美
２．発表標題 「ティロール南部における国籍・移住選択の推移―1940年代初頭の地域住民の動向を中心に―」
３．学会等名 イタリア近現代史研究会全国大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Hiroko MIZUNO
２．発表標題 Limits and Possibilities of Transnational Approaches: Brief Remarks on the Transnational Challenges to National History Writing, vol. IV
３．学会等名 Review Forum for the Writing the Nation Series（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Fuyuko EGUCHI
２．発表標題 Die Kinderrechte und Eugenik in der Zwischenkriegszeit
３．学会等名 KONSTRUKTIVE UNRUHE: Oesterreichischer Zeitgeschichtetag 2016 | Graz, Universitaet Graz, Austria (9-11, June 2016)（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計12件

１．著者名 水野　博子	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 402
３．書名 『戦後オーストリアにおける犠牲者ナショナリズム』	

１．著者名 柴田暖子	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 未定（印刷中）
３．書名 児玉谷史朗、嶋田晴行、佐藤章（編著）『（仮）地域研究へのアプローチ　グローバル・サウスから読み解く世界情勢』	

１．著者名 柴　宜弘、山崎　信一　編著	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 388
３．書名 『ボスニア・ヘルツェゴヴィナを知るための60章』	

1．著者名 タラ・ザーラ、三時眞貴子、北村陽子、岩下誠、江口布由子	4．発行年 2019年
2．出版社 みすず書房	5．総ページ数 488
3．書名 『失われた子どもたち―第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建』	

1．著者名 藤井欣子	4．発行年 2017年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 全360頁（藤井：136-141頁）
3．書名 「今はなきマイノリティ―ドイツ系住民」、柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』	

1．著者名 藤井欣子	4．発行年 2017年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 全360頁（藤井：151-156頁）
3．書名 「ケルンテンのスロヴェニア人―民族意識と生活環境」、柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』	

1．著者名 柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一（編著）	4．発行年 2017年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 全360頁
3．書名 『スロヴェニアを知るための60章』	

1．著者名 柴田暖子	4．発行年 2016年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 全388頁（柴田：306-314頁）
3．書名 「第46章　もうひとつの「少数民族」の暮らし―都市のドイツ系白人社会」永原陽子・水野晴信編著『エリア・スタディーズ　ナミビアを知るための53章』	

1．著者名 水野博子	4．発行年 2016年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 全434頁（水野：85-119頁）
3．書名 「オーストリア国民の記憶文化――反ファシズムから戦争の犠牲者へ――」石田勇治・福永美和子編『想起の文化とグローバル市民社会』（【現代ドイツへの視座―歴史学的アプローチ 1】東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター）	

1．著者名 百瀬亮司	4．発行年 2017年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 全348頁（百瀬：193-227頁）
3．書名 「クロアチア多民族社会におけるセルビア人の自決権―領域的自治の限界と文化的自治のジレンマ」山本明代、パプ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』	

1．著者名 木村真	4．発行年 2017年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 全348頁（木村：173-191頁）
3．書名 「バルカン地方の野菜栽培人の移動―一九世紀から二〇世紀初頭」山本明代、パプ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』	

１．著者名 江口布由子	４．発行年 2016年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 全336頁（江口：24-48頁）
３．書名 「 第一章 「福祉を通じた教育」の選別と子ども――赤いウィーンの子ども引き取りと里親養育 」三時眞貴子/ 岩下　誠/ 江口　布由子/ 河合　隆平/ 北村　陽子教育支援と排除の比較社会史――「生存」をめぐる家族・労働・福祉』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小澤　弘明 (Ozawa Hiroaki) (20211823)	千葉大学・国際教養学部・教授 (12501)	
研究分担者	木村　真 (Kimura Makoto) (20302820)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	
研究分担者	江口　布由子 (Eguchi Fuyuko) (20531619)	高知工業高等専門学校・ソーシャルデザイン工学科・准教授 (56401)	
研究分担者	鈴木　珠美 (Suzuki Tamami) (20641236)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員 (12603)	
研究分担者	藤井　欣子 (Fujii Yoshiko) (30643168)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員 (12603)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	古川　高子 (Furukawa Takako) (90463926)	東京外国語大学・世界言語社会教育センター・助教 (12603)	
研究分担者	山崎　信一 (Tamazaki Shinichi) (80376582)	東京外国語大学・その他部局等・非常勤講師 (12603)	
研究協力者	柴田　暖子 (Shibata Atsuko)		
研究協力者	百瀬　亮司 (Momose Ryoji)		